豊竹古靱大夫の「岡崎」を聽いて

本誌同人　太宰施門

何ういふ廻り合せか、私は義大夫であれ程有名な伊賀八をまだ一度も聽いてゐなかつた。それなのに芝居の方では仁左衛門、鴈次郎のを數回づゝ、また吉右衛門のを一回見てゐる。何うして芝居でそんなに度々出たか。矢張り義大夫で非常に面白い曲だから、芝居にしても屹度よいだらうといふ推測が一つの理由。次には內緒の話しだが、仁左や鴈次郎や吉右衛門の演し物に困り果てゝ、また他の俳優の振り當てに苦心して、その都度、剌りに頻繁に大劇場で出たものである。さうして何れも相當に見物席を緊張させたが、十分といふ所までは行かなかつた。せい〳〵七分どころが行き著き得る極點のやうに私に感ぜられた。

それは何ういふ譯で。解決はきはめて簡單である。この一時間半、あるひはそれ以上に延びる大物に、いはゆる中心人物が無い。何の役も思ふ存分に演じまくつて溜飲を下げ、見物をたんのうさせるやうに出來てゐない。政右衛門でも幸兵衛でも、お谷でも志津馬でも、みな五六分から二三分どころの演榮えの役どころである。それでは俳優中心の、殊に一人の主役に全部を集中さす歌舞伎の舞臺で成功する謂はれは無い。

實は古靱の「岡崎」を聽いて、この謎が解けたのである。この曲は何の役柄をも完全に理解し、語り、說明し得る大夫が一人で全部の綜合を成し遂げ、さうして全たい藝術效果を擧げるものである。某大夫がまだいたいけない時、「お谷やーい」の所でワン〳〵泣いた。それがこの人の最初の義大夫經驗であつたといふ實話をこの頃聞いたが、近く越路大夫の「岡崎」はさぞ面白かつたらうにと、それを外した不運が怨めしくも感ぜられる。だが古靱今度の所演は、眞に立派なもの、似寄つた世界を見わたして最高級のものであるやうに私は即座に感激した。「伊賀越」の中では無論の事、義大夫諸曲數百を列べ上げて數へて見て、一ばん大夫を光らす、大夫を中心の主役に擅く作の一つがこの「岡崎」なのである。言ふまでも無く大夫は名手である事が必要である。越路の沒後では古靱のものであり、彼を大きくし、またこの術の冴えを示すのに一ばん持つて來いの優作である、ことに一點の疑ひも無い。

「既に其夜もしん〳〵と遠山寺に告渡る早や九つの」と靜かに語つて行く。これ丈の一行あまりの句で夜更けの雪世界、一軒立ちの幸兵衛方が浮き上つて來る。寶境をはつきり詩的に描き出すこの大夫獨特の壇場である。以後はさら

さら事が運ぶ。芝居の方だと、出て來る役者の全部が揃つて才能があり、持ち役を見事に演出するといふ塩合は極めて稀で、始終我々には疵が見えて事を壞し勝ちであるのをここでは何處にも不十分さが無く、また過ぎた出しや張りの見られぬ無疵の豊かさで事件が流れて行く。人形も澤山出て、それぞれの動きも派手で賑やかであるが、大夫の物語り一筋が全體を抑へてゐるのは不思議と言はんばかりの鮮やかさである。

幸兵衛に請じ入れられての對談、十年あり昔の追懷、「幼少より育上し庄太郎であらうがな成程々々然らばあなたが其方がヤ是は〳〵と手を打つて盡ぬ師弟の遠州行燈かき立て〳〵打ながめ」云々。こゝでまた芝居の追懷がまじつて來るが、中車でも段四郎でも實に結構であつた。然も結構過ぎる見事なものであつた。が「過ぎる」といふ言葉が一つの疵になつて我々の中に不安を招ぶ。この二人に仁左衛門と鳩次郎の政右衛門を配して、高二重に二人を列べさせ間に行燈と莨盆を配した大きい舞臺だと、見物はもつともつと、數倍、十數倍、數十倍の感興を期待して固唾を呑んで待ち構へてゐるのである。然もそれが與へられないで次の件りへと無雜作に流れて行く。成る程そこで抒べられてゐる事柄は數ある人生事實の中で最も味はひの深い、皆々しく美しい感情の流露であるが、芝居のものとしては要するに挿話である。毛頭劇的でない。少くも歌舞伎のものとしては味が淡い。

しかし乍ら一方、大夫の語る話の一部としてそれは完全に義大夫的である。前の時代の四名優を二人づつ取り合はした檜舞臺の大演出、いはゆる豪華版のそれよりも、聲やその他に缺點のある古靱大夫一人の物語りの方がより完全であり、より高い感激の藝術になつてゐる。

興味は三轉して「生れ子を抱てはる〳〵」たどつて來るお谷の出になる。こゝは何と言つても芝居のものである。徳川期の大發明と言つてよいものゝ一つ、花道の效果がしたゝか感ぜられる最も有效な場面である。また私の見た中での歌右衛門と菊五郎とが素晴らしくよいお谷であつた。まだ身體のしつかりしてゐた歌右衛門が揚幕をチヤラリと引かせて杖を手に足を本舞臺へ運ぶ。それは若い私の心と血を全く逆上させたものである。菊五郎の方はその後數年間、踊りと世話物だけへ行つて院本物へ振り向かなかつた事を、劇壇の大きな損失だと思ふといふ意味の文を何處かへ書いたやうに覺えてゐる。それ程二人とも、門外での一切の動きと表情に感情が溢れ表現が正しく、傑作の演出を見せて呉れた。――しかし無論前に述べて置いた通りの挿話としての傑作、斷片としての面白さである。

古靱のこゝの所で、「お谷やーい」まで行かない先、「身はならはしと山寺の鐘がなれば寢る事にして星の光りをともし火と思ふて……」邊でもう私は泣いてしまつた。そ

れまで順々に感興が動かされて行つたのである。在りやうを言へば人形の方へは餘り注意が向かない。たゞ上手で幸兵衛女房が糸を紡いでゐる。少し離れて政右衛門が煙草を刻んでゐる。下手平舞臺の門外でお谷が惱んでゐる。その取り合せのよいので、我々にごく親しい人間情味の溢れた世界の美しさが、ぼんやり繪のやうに感ぜられたまでである。だから眼から得られた刺激はごく淡く、全く從の從である範圍を出ない。ほぼ一切が耳から來る。何んな苦勞も何でも無い。「殊更癪で乳ははらず雪に こごえ雨にうたるるつらさは骨にこたゆれども旦那殿や弟が敵を尋る辛抱はまだ〳〵〳〵こんな事ではあるまいに其艱難にくらべては雪はおろか劍の上にも寢るのがせめて女房の役……」。少し考へれば女の心構へとして一寸異議の出さうな場合であるが、その成立を許さないほど眞情を籠めて泣き、忍び、神に祈り、「此子を夫に渡すまでは生きて居たい、アヽ死にともない」と述懷する。それを傍で聞く政右衛門には、口に出さぬだけなは一そう強い苦艱の惱みがあり、兩方が正に「くひしばる喉に熱湯内外に水火の責苦」である。これを大夫はその通りの苦しみに語らねばならぬ。いつも通り十分に、併し過ぎて下品にはした無くならないやうに、物足りない感じを呼ばないやうに。卒々坦々、何の技巧をも殊更らしく用ゐないやうに、しかし長い間の修練できはめ盡された適切な、その場に正確な表現で言ひ現はさねばならない。此の肝心の場所を古靱はあらを捜し出さしやうといふ隙を一ケ所も私に與へなかつた。私は脆くも眼を眞赤にして、たぢぼうつと大夫の壁に引かれて行つたのである

以下また事件がすらすらと流れて行く。素より疵の無い或ひは少ないのはこの人の日常だから不思議は無いが、も少し悠くり味はせてもらひたいの望蜀の念ひがしきりに湧く。外の人なら速くこんな所を通り過ぎて、聽き所へ駈けつけたいと氣を焦るであらう。大へんな遂ひである。

初めて見た實の赤子を刺し殺す、芝居では可なり不愉快な刺戟を受ける所だが、人形浄瑠璃ではその點は救はれる。これは人形と歌舞伎とを分つ非常に重大な箇所の一つである。如何に樣式化されて、直接生理の同感を招ばないやうに色々の工夫が伴なひ、藝術の被ひで包まれてゐても、歌舞伎は所詮ずつと人形よりも現實のもの、寫實的である。人間と人形との違ひは二つの藝術樣式を隔てる根本のものなのである。だから少しもよい心持ちの邪魔をする事無く適當な、十分の速さ強さで場面が展開する。そして志津馬と政右衛門二人の對面といふ最後の大きな山へ到達する。

哀れさ、人情味の勝つた世話風の氣分がこゝで一寸の間一變して、強い感覺に阿ねる武張つた場面になる。双方とも刀の鯉口を切つて詰め寄る。「ただ一討と……居合腰」

に「氣配り目くばり」の姿勢である。幸兵衛はまん中に「むんずと居直り唐木政右衛門和田志津馬ふしぎの對面滿足であらうな」と大きく呼ばはる。一時間何十分と語りつづけて、心の餘裕と聲とに疲れが出、焦りが見えて來さうに思はれるところ、さうあつて更に不思議でない箇所であるのを、古靱は實に大きく强く演出し、力の籠つた對話を双方の間につゞけて、節義と純情とを縫ふ武士の心やりを抒べて行く。立ち會ふ人物の何れもが皆淸らかに高い、理想世界の感情に動き、それに燃え上つた詩を放散する。朗らかな、稀に貴い印象を刻み込む藝術の流轉である。

だが斯うした理想美の創造はよく我々の住む下界との維がりを絶ち切つて、彼の世のもの、他の世界での出來事らしく疏遠の邪毒を流し入れる場合が無いでもない。だから餘り長く綺麗な感情ばかり展開さすことは危險である。やもすると雲の上遙かの方へ飛び去つて。聞いてゐる我々から餘程遠いものに變形してしまふ惧れがある。この用意は何處でも、義大夫曲の作者は十分心得てゐて、直ぐ純人間の、この世のものをその間に配し入れる。理想を現實の絲でつなぎ留める。すなはちてうどそこへ躍り込んだるお谷「こなたは男のあきらめ有る」幸兵衛が人の世のものへと引き下ろせば。お谷は「今一度生返り乳房を吸うてくれよかしと庭に轉びつ這まはり、抱きしめたる我が身も雪と消ゆべき風情なり」の、ほんたうに人間らしい、然もその一ばん深いものゝ放散がある。

事件に事件、感動に感動る重ねた不幸の人物の上に、今最後の光明を與へてこの段を終らねばならぬ。親が子を刺し殺し、或ひは役目を忘つて嘘を述べ立てた、それらを償うて餘りのある晴朗さが心の全面に照り輝やくことが必要である。それはやがて聽衆全部の心となるからである「非道の股五郎」が落ちて行く道中、中仙道の後を追うて、娘の手引きで二人は出で立つ。希望にかゞやいて勇み上るこの最後の點晴は、もとより古靱大夫の特に秀でた語り口の一面である。しつかり情調を溢れさせてほんたうにちやんとした段落の感じを味はせてこの長丁場が終つてゐる。

配合に可なり細かい注意は拂はれてゐるが、普通でない事件の矢つぎ早やの聯續、何の一つも十分劇的でなく、一切で斷片の集まりと言つた感じ。實演の芝居では完全な感激は味はれない。僅かに人形淨瑠璃で、或ひは素語りで效果の豫期される作。全部が大夫の廣い、完なうた理解と表出と綜合とによつて仕上げられる。だから名手の技倆と頭の緻密さとは容易にこの作の上演で見分けられよう。

以上が初めて聽いた「岡崎」即夜の私の感想である。

（完）